藪むらに家のすくなき雪解哉　二鴎
拝む気かはやゆとりなり初日かけ　有秀
立春や声ほそ〳〵と峰の松　里夕
ふっくりと歯朶をしとねや鏡餅　三楓
くるゝ迄日和や鴨のうき沈み　不退
もらふても野心うつる若菜かな　蓬宇
一在所笠ぬふ里やもゝの花　塞馬
降雪の柳にあはき雫かな　完伍
来る春や庵にも白きいも大根　嵐牛
蓬萊の傍に似合し老夫婦　杜水
朝風に雲出つくして谷の梅　烏谷
何もまたもえぬはたけに春の雨　月栖
皆梅となりけり今朝の雪も花　由岐雄
春の夜やにきやか過て人も来す　木鶏
雲かけの落つく水やちるさくら　白羽
ある薺囉うておくも愛相かな　薫岱
降ほとは雪もつもらす猫の恋　あやを
乗合の寐上戸おこす霞かな　椿山
見渡しの木々に春立色香かな　蒼白
元日のものにはしたり玉つはき　旭齋
朝かけやほくるゝは花ちるは露　月杵
あとけなき長男わさなり水祝ひ　喜年
初空をはや汚しけりちきれ雲　乙瓢
うれしさや夜の明たれは花の春　文窓
眉なてゝすゝみ出けり初日の出　巣欣
人の日もひそかに暮て松の月　優々
草の家もわすれすつけて初からす　梅谷
谷そこの花吹あけるゆふへかな　よし香
かたかけやひとり気高く花を友　天由
野へ袖をひかるゝ朝やはるの風　花外
小松野や葉に盛るほとの春の雪　五渡
つく〳〵と摘人まつやつく〳〵し　逸渕
先々か梅なり峰に日のにほひ　溪齋
池ひとつむかふにおきぬ若菜籠　曲川
羽やすめとみえて麦ふむ雲雀哉　姑山
露霜やふめは音ある笠のほね　如草
去年から咲てふるひす梅の花　桃五
自剃して出る気になるや御忌の鐘　雀石
元日の人かけさすや草の庵　白亥
乗合やはなし上戸は傀儡師　鳥岳
恵方にもかきらすうれし向ふかた　野井
畑打やあたまのうへに山の道　乙也
家のたつもやうのみえる野梅かな　未足
塵塚のうはもりにちるさくらかな　梅通
何を着てなに履て出ん小松曳　公成
黄鳥や飛時ちさくおもはるゝ　波同
畔道やしらぬ礼者のゆつりあひ　黙池
薬子のひかへて居るや几帳かけ　九起
梅はやし日の暮おそし梵寺　碩水
御降や場にちらかる塗木履　露川
打火にも勢ひみえて花のはる　奇泉
わすれ井や梅をかさしの薄けふり　自長
居まはりは水田はかりや春の月　雪簫
一里にあまりて野にも梅の花　赤甫
元日の種火や灰も入かへて　淡節
立なから茶を手にのせて遠柳　有節
見ぬ時も只おもしろし花さかり　芹舎
声ほとは羽ちからみえす揚雲雀　林曹
弓引に出るや芝生の朝かすみ　素屋
垣せねは庭にも下りるひはりかな　昇左
鳥風の遠き空ふく霞かな　松隣
いそかねは道もふみよし梅の花　潮水
門松や鎗くゝらせるひとひねり　知風
黄鳥や川飛々に島はたけ　稲處
酒の香ののかぬ板間や松のうち　養爪
初東風のふくや二見の岩に注連　雀叟
もてなしの過て物うし花の宿　黍丘
長閑さやそよ〳〵風のありなから　可樵
水にまた影のさゆるや春の月　湧瀧
鄙ふりやはたらきつるゝ若菜籠　玉骨
雲板のひゝきに落るつはきかな　糠子
うくひすや来たとおもへはすいと去ぬ　糠人
行雲や月は朧のそれなから　可大
雀子や先飛たけの羽つくろひ　醒花
人の来る愛相も出来て庵の松　西坡
初夢を見て心よくわすれけり　古谷